OSAKA MUSEUMS 学芸員 TALK トーク&シンク THINK

OSAKA MUSEUMSって面白いかも！

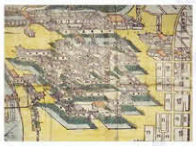
2019年4月に、「地方独立行政法人 大阪市博物館機構」が誕生しました。
大阪市内の6つのミュージアムが集まってできた新しい団体には、70名以上の学芸員が所属しています。
美術・歴史・自然・科学……、それぞれの得意分野をもつ“学芸員”のことを知ってもらえるように、
学芸員が“いま”話したいことを皆さまにお届けするイベントを開催します。

11月2日［土］

13:30～16:00（13:00 開場）　会場：大阪市立東洋陶磁美術館 講堂

徳川大坂城築城400年① 大坂の陣から大坂城再築へ
大澤 研一（大阪歴史博物館学芸員）

大坂の陣が終結してまもなく大坂は幕府の直轄地となり、元和6年(1620) には大坂城の築城が始まりました。現在の大阪城の大部分はこの時の築城によるもので、幕府はその建設に大きな力を入れました。その建設経過を見ていきながら、徳川家築城の大坂城の意味合いについて考えます。


徳川大坂城〔寛文11年（1671）新板大坂之図〕より

国宝「曜変天目」と「油滴天目」の魅力にせまる
小林 仁（大阪市立東洋陶磁美術館学芸員）

中国宋時代につくられた黒釉茶碗は、禅宗や喫茶文化とともに日本にもたらされ、後に「天目」と呼ばれるようになりました。その代表が国宝「曜変天目」と、東洋陶磁美術館所蔵の国宝「油滴天目」（写真）です。国内外で話題となっている曜変天目と油滴天目のとっておきの話を最新の研究成果とともにご紹介します。

国宝「油滴天目」南宋時代・12-13世紀　建窯
写真：六田知弘

11月9日［土］

13:30～16:00（13:00 開場）　会場：大阪市立東洋陶磁美術館 講堂

韓国のやきものと日本人
鄭 銀珍（大阪市立東洋陶磁美術館学芸員）

韓国陶磁の研究には、戦前から日本人が深くかかわっていました。墳墓などから再発見された高麗青磁ももちろんですが、とくに朝鮮白磁の研究は浅川伯教、巧の兄弟および、この二人と交遊のあった柳宗悦から始まったと言えます。いまだに人気の衰えないそうしたやきものが、どのように世の中に現れ、高く評価されていったのかをお話します。

左：浅川伯教旧蔵「青花辰砂蓮花文壺」朝鮮時代・18世紀後半（安宅英一氏寄贈）
右：浅川巧旧蔵「青花窓絵草花文面取壺」、朝鮮時代・18世紀前半（安宅昭弥氏寄贈）
2点とも大阪市立東洋陶磁美術館所蔵

徳川大坂城築城400年② 城郭石垣の到達点 徳川大坂城
松尾 信裕（大阪歴史博物館学芸員）

城郭石垣は安土城で本格的に出現し、豊臣大坂城にも採用されました。その後の天下統一の過程で各地に城郭が築かれるに伴って石垣構築技術は進歩し、大坂夏の陣後の元和6年（1620）から始まる徳川大坂城再築工事で集大成されたのです。今回は石垣の変遷をたどりながら徳川大坂城の石垣構築技術の高さを探ります。

大阪城南外堀の石垣

11月16日［土］

13:30～16:00（13:00 開場）　会場：大阪歴史博物館 4F 第1研修室

出土破片が語る“世界の歴史”－鎖国期の輸入品取扱説明書－
松本 啓子（大阪市文化財協会学芸員）

発掘資料はどこでどんなふうに出土したかを的確に確認すると、思わぬ歴史が見えてくることがあります。今回はそんな出土輸入品のなかで、失敗の“やっちまったな”事例と、世界の歴史に食い込めたいい意味での“やっちまったな”事例を紹介し、考古学ならではの出土品の楽しみ方をお話しします。

マジョリカアルバレルロ（森忠彦氏所蔵品（左）・大坂出土品（右））

百年前の庶民を求めて －近代大阪の芸能と観客－
船越 幹央（大阪市博物館機構学芸員）

過去を生きた名も無き庶民。その喜怒哀楽を求めて、百年前の大阪へ。この町と町に暮らした人びとの日常感覚をつかみ、現代とは異なった「大阪」を知ること。庶民的な娯楽である芝居・諸芸・活動写真の様子を中心に、町の姿や日々の労働などを絡めて、近代大阪に生きた庶民について考えます。

繁華街の風景

11月23日［土・祝］

13:30～16:00（13:00 開場）　会場：大阪歴史博物館 4F 第1研修室

「仏像 中国・日本」展のできるまで －美術館で仏像を観ること－
齋藤 龍一（大阪市立美術館学芸員）

各地のお寺や博物館・美術館から仏像が出品される展覧会はどうやってつくられる？ 2019年10月12日から12月8日まで、大阪市立美術館で開催される「仏像 中国・日本」展を中心に、仏像展ができるまでの舞台裏と、「美術館で仏像を観ること」の意義についてお話しいたします。

誕生仏立像　大阪市立美術館

大坂の天文学者・間重富 －重文資料から業績を読み解く－
嘉数 次人（大阪市立科学館学芸員）

江戸時代の大坂で活躍した間重富は、質屋を営みながら高度な研究を行った、近世日本を代表する天文学者です。その多彩な活動の様子を、2016年に国の重要文化財に指定された、間重富関係資料から読み解いていきます。

間重富著『星学続稿』

後半日程

2020年1月11日（土）・1月18日（土）・1月25日（土）に開催予定です。
詳しくはHPをご覧ください。

応募方法

参 加 費：無料（ただし、展示室に入場される際は、別途観覧券が必要です。）
参加方法：WEBサイトでの各回事前申込制（先着順）
右のQRコードより大阪市博物館機構HPへアクセスし、TOPページのリンクより詳細へお進みください。応募フォームより申し込めます。
問合わせ：大阪市博物館機構
〒540-0008 大阪市中央区大手前4-1-32（大阪歴史博物館内）
TEL：06-6940-0569（平日9:30～17:00）　FAX：06-6940-4471
※タイトル・内容等は予告なく変更する場合があります。あらかじめご了承ください。

お申し込みはWEBから！